

徳島県立城ノ内中学校
「学力向上実行プラン」

研究テーマ

- ①社会の平和と発展に貢献する人材となることをめざし、主体的に学ぶ力を伸ばす指導
- ②自己肯定感を高めることにつながる言語活動の充実

学力向上検討委員会構成

学力向上推進員 着藤 文恵 (学力向上推進担当・第1学年主任)	委員 林 宏美(進路指導課長・第3学年主任), 久保 博正(企画・研究課長・社会科主任), 森岡 宏文(教務課長) 齋藤美智代(第2学年主任・国語科主任), 篠原 貴道(数学科主任) 紅露 瑞代(理科主任), 田中 弘子(英語科主任)
--	--

校長
岩崎 洋

(1)基礎的・基本的な知識・技能の習得

児童生徒の状況	具体的目標(目指す子供の姿)	成果指標	中間期の見直し	取組状況	達成状況
よさ 各教科等において基礎的・基本的な知識・技能の習得については、一定の成果が見られ、学力に二極化傾向がない。	①基礎的・基本的な知識・技能を確実に身につけることができる。 ②毎日の自主学習を創意工夫して内容を充実させ、幅広く何度もくり返して学習することができる。	定期テストにおいて各教科が掲げた目標点の達成率を80%以上にする。		①期日に遅れる生徒はいないが、毎日ほぼ全員が提出できた。②各教科で適宜行うことができた。③年間5冊自主学習ノートを上げることができたが、内容の充実させる指導は十分とは言えない。④テスト勉強計画表を効果的に活用させることができた。	定期テストで基礎的・基本的な知識・技能を問う問題の達成率は、全体の平均が72.4%であった。
課題 下位層では、苦手教科において知識・技能の習得が十分であるとは言えない。多くの宿題をこなすことに追われ、自主的に予習・復習をすることができていない。創意工夫した自学自習ができていないと言いはない。	具体的方策(教員の取組) ①各教科で小テスト等を実施するとともに、基礎的・基本的な知識・技能を高める宿題をsmall stepで計画的に出す。 ②自主学習ノートの意義や有効な活用方法を指導し、生徒各自に自らの課題を自覚させ、取組の改善をさせる。 ③テスト勉強計画を個別に立てさせ、主体的に着実に復習させる。	取組指標 ①宿題や生活記録を毎日全員に出させる。 ②学習内容に応じて小テストを行い、必要に応じて弱点補強をする。 ③創意工夫し、内容を充実させた自主学習ノートを年間5冊行わせる。 ④テスト勉強計画表に計画と記録を書かせる		評価 B	次年度における改善事項 ・各教科で小テスト等を継続して実施し、幅広く何度もくり返して学習し、定着を図る。 ・個別に弱点補強をすることができる場や機会を設ける。 ・基礎的・基本的な知識・技能の習得を高めるような課題や宿題を与える。 ・自主学習ノートの内容充実を図る指導を個別に行う。

(2)知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成

児童生徒の状況	具体的目標(目指す子供の姿)	成果指標	中間期の見直し	取組状況	達成状況
よさ 話すことや書くことによって、自分の感想や考えを伝えることができる。授業の中で表現活動をする際、より高度で豊かに表現できることをめざし、他から学びながら意欲的に取り組むことができる。	目的やめざす姿を明確に理解し、それに照らし合わせて課題をつかみ、自分の考えをわかりやすく話したり書いたりすることができる。	授業評価のアンケートにおいて、思考力・判断力・表現力等に関する項目で肯定的な回答をした生徒の割合を昨年度より向上させる。		校種間を越えたものを含め、相互授業参観を各自4回以上行うとともに、研究授業及び授業研究会をもち、評価しあうことができた。	昨年度と比べて、生徒が活動に意欲的に取り組めた割合は2.5ポイント向上し、活動を楽しみ興味・関心をもった割合は3.3ポイント向上した。
課題 課題解決に向けて自ら考え判断する力に課題が見られる。小集団では意見を発言できても、大きな集団になると自信を持って発言することができないこともある。	具体的方策(教員の取組) 全ての教科で自分の考えを明らかにさせる言語活動を行う。	取組指標 課題に応じた研究授業・授業参観を年間4回以上行い、教師が互いに評価し合う。		評価 B	次年度における改善事項 ・全ての教科で、言語活動を年間計画や授業時間の中で計画的に位置づけ、活動内容を充実させるとともに習得した知識・技能を実際に使用する場面を増やす。 ・授業の終わりに、各自の目標達成や取組について、生徒が自己評価を行う機会をつくる。

(3)主体的に学習に取り組む態度の育成

児童生徒の状況	具体的目標(目指す子供の姿)	成果指標	中間期の見直し	取組状況	達成状況
よさ 落ち着いて学習に取り組む。読書や家庭学習の習慣が定着しており、与えられた課題について真面目に取り組むことができる。	創意工夫しながら学ぶことを楽しむとともに、授業や様々な活動に一生懸命取り組む過程を大切に、自分の夢の実現に向けて根気強く努力する自分を好きになることができる。	人権アンケートにおいて自己肯定感を持つ生徒の割合を、各学年で4月当初より向上させる。		①生徒会委員会活動においては、毎月生徒が主体的に活動することができたが、学校行事においてはできなかった。②夏冬2回の三者面談だけでなく、常に家庭との連絡を密にすることができた。	4月と比較し、今の自分が好きだと解答した生徒の割合は6.7ポイント減少した。特に、1年生は17.7ポイント減少しており、目標や理想を高く掲げそれに到達できていないことを否定的にとらえているためと考えられる。
課題 学ぶ楽しさを感じ、主体的に学んでいるとは言えない。また、「今の自分が好きです。」と言える自己肯定感が低い生徒が見られる。	具体的方策(教員の取組) ①学校生活全体を通して主体的な活動を多く取り入れ、努力する姿や人との関わりにおいて生徒各自や集団を誉め認め合う。 ②家庭と連携をとり、ともに協力して子ども一人ひとりを見守り、自信を持たせる。	取組指標 ①学校生活全体において、生徒が主体的に企画・運営する場を学期に1回以上設ける。 ②機会を捉えて家庭との連絡を密にする。		評価 B	次年度における改善事項 ・他と比べる相対的評価でなく、目標や夢に向かって努力を続ける自分を認める絶対評価ができるような仲間づくりを積極的に行う。 ・学校行事や各授業の中で、体験することや言語活動を重視し、事後に認め合うふり返しを行う。 ・道徳・学活等の授業を確保し、自分の考えや思いを語りあう活動を行う。 ・学校はもちろん、家庭でも生徒の自己肯定感を高める視点で話してもらえるよう啓発する。

平成27年度 学力向上ロードマップ

